

継続支援における障害児・者施設と医療機関との連携の充実に関する研究

東松ゆみ 川崎令子 松井智子（中濃厚生病院） 兼松恵子 長谷川桂子 古川直美 北村直子（大学） 船戸裕美子（第二美谷学園） 石井あけみ 恩田貴代江（第三美谷学園） 岩月米子（県立ひまわりの丘第一学園） 野原三津子（県立ひまわりの丘第二学園） 村瀬尚子（県立ひまわりの丘第三学園） 鷺見富貴子（県立ひまわりの丘第四学園） 高岸朝子（岐阜県福祉総合相談センター） 立木由美（県立陽光園）

I. はじめに

知的障害児・者施設（以下施設とする）の入所者が外来受診や入院するときに、看護師は入所者から、受診までの経過や生活状況等の必要な情報を直接収集できないことがある。そのため、看護師は、施設職員から情報収集し、必要なケアを行い、施設で注意することを伝えている。しかし、情報交換をしても入所者の症状が悪化したり、再入院になったりすることがある。これは、看護師と施設職員の情報交換の内容が充分でなく、また、方法も適切でないことが一因ではないかと考える。従って、外来の場で、外来看護師と施設職員の情報交換の現状とそれに対しての意識を明らかにし、入所者に質の高いケアを継続するための外来での連携のあり方を考える基礎資料が得られると考える。そこで、施設職員と看護師を対象に入所者のケアを継続させるための情報交換に関する質問紙調査を行ったので報告する。

II. 研究目的

知的障害児・者施設の職員と病院の外来看護師との外来の場での連携の現状を明らかにし、施設入所者のケアを継続させるための連携の検討の基礎資料とする。

III. 方法

1. 調査対象：2施設の入所者に直接ケアを行っている施設職員と2施設の入所者が主に通院・入院をしている中核病院の外来看護師。
2. 調査方法：連携に関する独自の質問紙を作成し、各施設長宛に質問紙を郵送し配布した。外来看護師は外来看護師長を通して配布した。質問紙は、各々の施設と外来に回収箱を設置し、回収した。
3. 調査期間：平成17年8月22日～9月5日
4. 調査内容：1)回答者の属性(年齢・性別・雇用形態・経験年数)。
2)施設職員への調査内容：(1)外来受診に引率した経験の有無。(2)外来看護師への情報提供の有無。(3)外来看護師に提供した情報が活かされているか。(4)外来看護師が必要な情報聴取をしているか。(5)外来看護師は入所者に合わせた説

明・指導をしているか。(6)外来看護師の説明・指導が理解できたか。(7)外来看護師に配慮してほしいこと。

3)外来看護師への調査内容：(1)入所者に対応した経験の有無。(2)引率者からの情報提供の有無。(3)施設職員からの情報を活用しているか。(4)必要な情報を聴取しているか。(5)入所者に合わせた説明・指導をしているか。(6)入所者・施設職員に働きかけたいこと。

5. 分析方法：選択肢の回答は、単純集計した。記述内容は、複数の研究者で意味内容の類似性にそって分類し、命名した。

6. 倫理的配慮：調査の趣旨・目的を文書で明記した上で、協力を依頼した。質問紙は、無記名とし個人が特定されないよう配慮した。

IV. 共同研究への取り組み体制や協働の実際

施設の看護職の共同研究への参加は、2施設の施設長に共同研究の趣旨、目的を文書で説明し、協力、了解を得た。病院の看護職の参加については、看護部長に共同研究の趣旨、目的を口頭で説明し、協力、了解を得た。

施設看護職、病院看護職と大学教員で今年度の研究目的、方法等を検討し、質問紙の作成を行った。質問紙の配布、回収は主に、各々の施設、病院の共同研究者が実施し、調査結果の集計・分析は、共同研究者全員が参加できるように日程調整をした。これらの共同研究活動を通して、共同研究者間で調査結果の共有を図った。

V. 結果

1. 施設職員への調査結果

1)回収率：91%(配布198名、回収181名)

2)対象者の背景

(1)年齢：10歳代1名(1%)、20歳代45名(25%)、30歳代35名(19%)、40歳代44名(24%)、50歳代47名(26%)、60歳代以上7名(4%)、無回答2名(1%)

(2)性別：男性51名(28%)、女性100名(55%)、無回答30名(17%)

(3)所有資格(複数回答あり)：保育士51名(28%)、ヘルパー45名(25%)、介護福祉士25

名 (14%)、社会福祉士 13 名 (7%)、看護師 5 名 (3%) 准看護師 2 名 (1%)、その他 57 名 (31%)

(4)雇用形態:職員 120 名 (66%)、嘱託 3 名 (2%)、パート 35 名 (19%)、その他 10 名 (6%)、無回答 13 名 (7%)

(5)経験年数:表 1 のとおり。

表 1 施設職員の現在と過去の施設勤務年数 (n=181)

	現在の職場	過去の職場
1 年未満	9 名 (5%)	25 名 (14%)
1~3 年未満	37 名 (20%)	9 名 (5%)
3~5 年未満	34 名 (19%)	16 名 (9%)
5~10 年未満	49 名 (27%)	14 名 (8%)
10~20 年未満	15 名 (8%)	15 名 (8%)
20~30 年未満	13 名 (7%)	17 名 (9%)
30 年以上	7 名 (4%)	2 名 (1%)
無回答	17 名 (9%)	83 名 (46%)

3) 外来受診への引率経験の有無:

経験あり 131 名 (72%)、経験なし 48 名 (27%)、無回答 2 名 (1%)

4) 外来看護師への情報提供をしているか:

している 100 名 (76%)、していない 32 名 (24%)

5) 外来看護師に提供した情報が活かされているか:

活かされている 77 名 (73%)、活かされていない 28 名 (27%)

6) 外来看護師は必要な情報を聴取しているか:

している 98 名 (75%)、していない 29 名 (22%)、無回答 4 名 (3%)

7) 外来看護師は入所者に合わせた説明・指導をしているか:

している 75 名 (57%)、していない 43 名 (33%)、無回答 13 名 (10%)

8) 外来看護師の指導・説明が理解できたか:

できた 36 名 (27%)、できなかった 91 名 (70%)、無回答 4 名 (3%)

9) 外来看護師に配慮してほしいことは、表 2 に示す。

2. 外来看護師への調査結果

1) 回収率: 95% (配布 40 名、回収 38 名)

2) 対象者の背景

(1) 年齢: 30 歳代 9 名 (24%)、40 歳代 17 名 (45%)、50 歳代 11 名 (29%)、無回答 1 名 (3%)

(2) 性別: 女性 33 名 (87%)、無回答 5 名 (13%)

(3) 所有資格 (複数回答あり): 看護師 25 名 (66%)、准看護師 9 名 (24%)、助産師 2 名 (5%)。

(4) 雇用形態: 職員 10 名 (26%)、嘱託 23 名 (61%)、パート 2 名 (5%)、無回答 3 名 (8%)

(5) 当院外来での経験年数: 1 年未満 4 名 (11%)、1 年~3 年未満 4 名 (11%)、3~5 年未満 6 名 (16%)、5~10 年未満 5 名 (13%)、10~20 年未満 9 名 (24%)、20~30 年未満 4 名 (11%)、30 年以上 2 名 (5%)、無回答 4 名 (11%)

3) 障害児・者の外来受診に対応した経験の有無: あり 37 名 (97%)、なし 1 名 (3%)

4) 引率者からの情報の提供の有無:

あり 29 名 (78%)、なし 8 名 (22%)

5) 施設職員からの情報を活かしているか:

活かしている 26 名 (70%)、活かしていない 7 名 (19%)、無回答 5 名 (14%)

6) 引率者から必要な情報を聴取しているか:

聴取している 27 名 (73%)、聴取していない 10 名 (27%)

7) 入所者に合わせた説明・指導をしているか:

している 8 名 (22%)、していない 24 名 (64%)、無回答 5 名 (14%)

8) 外来看護師が入所者と施設職員に働きかけたことを表 3 に示す。

2. 本研究の成果

本研究は、医療機関の外来の場において、施設職員と外来看護師が情報交換を通して連携をどのように図るかを目的としている。今年度は、施設職員と外来看護師に質問紙調査を実施し、情報交換を中心とした連携がどのように図られているかの現状と施設職員・外来看護師の意識を明らかにした。従って、現地側の施設と医療機関の業務・実践の改革に直結した成果は得られていない。しかし、調査を実施したことで、外来看護師に入所者のケアに対する意識や行動に多少の変化が現れていることが窺えた。施設職員が入所者の外来受診に同行した時、積極的に外来看護師から入所者や施設職員に声をかけたり、緊急での対応では、本来なら許可しない母親の付き添いを許可したりするなど、障害を持っている入所者と家族、施設職員への配慮が外来看護師からされるようになったと施設職員が話していた。また、施設職員の調査結果を分析する過程で、共同研究者である施設看護師は、医療の専門家でない施設職員が入所者の外来受診の同行に責任をもってあたろうとしている姿勢を感じ取っていた。このように、今回の調査を通して、施設職員、外来看護師双方に施設・医療機関との連携に意識の変化が見られるようになった。この施設職員と外来看護師の意

識の変化が、次年度の取り組みに役立つと考える。

VI. 考察

1. 回収率

施設職員、外来看護師ともに質問紙調査の回収率が9割を越えた。これは、現地共同研究者が自施設の職員に質問紙調査を行ったことと、調査内容が双方の職員の関心が高い内容であったことが影響していると考えられる。

2. 対象者の背景

施設職員の年齢は、20歳代から50歳代まで各々20～30%を占めていたが、施設の経験年数で見ると、現在の職場での経験年数10年未満が8割、過去の職場での経験年数10年未満が6割と、年齢に対して経験年数が少なく、施設での仕事の経験が少ない職員が多いことがわかった。また、施設職員の所有資格は、保育士、ヘルパー、介護福祉士などで6割を占めているが、所有資格に回答しなかった人が3割近くあり、看護や介護、保育などの専門資格をもっていない職員がいることがわかった。一方、外来看護師の場合は、40歳代、50歳代が大半を占めているが、外来の経験年数10年未満が5割と、外来看護師も年齢に対して現在の職場での経験年数が少ないことがわかった。

3. 情報交換について

1) 障害児・者の外来受診の経験

施設職員の7割、外来看護師の9割以上が入所者の外来受診の経験があり、ほとんどの外来診療科に入所者が受診していることがわかった。

2) 外来受診時の入所者の情報について

施設職員の8割近くが外来看護師に情報提供し、その情報が活用されていると答え、外来看護師も8割近くが、施設職員から情報提供を受け、その情報を活用していると答えていた。しかし、施設職員の2割は情報提供しておらず、外来看護師も2割が情報の提供がされていないと答え、受診時に入所者の情報提供をしなかった場面や情報が活用されなかったと感じた場面があったことが窺える。情報提供には初診か再診かが影響すると思われるが、設問では初診と再診を分けて尋ねていないため、初診・再診による違いは明らかでない。そのため、施設職員が情報提供しなかった理由と外来看護師が情報提供されなかった理由、情報が活用されなかった理由については、施設と医療機関の連携による継続支援を考えるためには、今後検討しなければならない。

また、6割の外来看護師は、入所者に合わせた説明・指導をしていないと答え、施設職員の4割

が、外来看護師が入所者に合わせて説明・指導をしていないと答えていた。これは、外来看護師が、受診者がなんらかの障害を持った入所者であるという受診者の特性を踏まえた指導ができていないことが考えられる。外来看護師が情報を活かして、入所者に合わせた説明・指導をするためには、提供される情報と説明・指導に必要な情報の吟味が求められる。一方、3割近くの施設職員が、施設職員自身が外来看護師の説明・指導が理解できなかったと答えていた。外来看護師は、入所者に合った説明・指導とともに、同行した施設職員にも説明・指導が必要であり、施設職員の大半が看護職でないことに配慮した説明・指導が必要であると考えられる。

3) 外来受診の引率時に外来看護師に配慮してほしいこと

施設職員は提供する情報をしっかり聞いてほしいという思いから、外来看護師に「丁寧な情報収集」を求め、さらに、入所者や施設職員が理解できるように「わかりやすい説明」を求めている。また、「受診者に合わせた対応」、「年齢に応じた対応」や「受診環境の調整」など情報交換だけでなく、入所者がさまざまな障害をもっていることを踏まえた対応を希望していた。

4) 外来看護師が入所者と施設職員に働きかけたこと

外来看護師は、入所者と施設職員から「情報収集」をして、その情報を活かして「適切な対応」をしていきたいと考えていることがわかった。また、障害を抱えている入所者の家族の問題にも目を向け、「家族への支援」も働きかけたいこととして捉えていた。施設職員が求めている「受診環境の調整」は外来看護師も今後改善しなければならないことと捉え、具体的な方策を考えていこうとする姿勢が窺えた。

VII. まとめ

1. 8割近くの施設職員は外来看護師に障害児・者に関する情報を提供し、同様に8割近くの外来看護師も施設職員から情報を収集していた。

2. 外来看護師の6割及び施設職員の4割は、障害児・者に合わせた説明・指導をできていないと捉えていた。これは、収集した情報が活用されていないか、説明・指導をするための必要な情報収集ができていないことが考えられる。

3. 外来看護師は、適切な対応するための情報収集が必要であると捉え、施設職員は、丁寧な情報収集と障害児・者に合わせた対応を外来看護師に求めている。

4. 外来看護師と施設職員は障害児・者に合わせた説明・指導の充実を課題と捉えている。障害児・者施設と医療機関が連携を図るためには、双方で、必要な情報を吟味し、情報交換ができることが重要である。

Ⅷ. 今後の課題

今年度は、施設と医療機関における継続支援のための連携の一環として、施設職員と外来看護師に、外来における情報提供や活用についての現状と意識の調査を行い、外来受診時の問題・課題が明らかになった。しかし、入所者が治療を受ける場は外来だけでなく、病棟もあり、入所者が入院する場合は、病棟も重要な連携の場となる。従って、次年度は入所者が入院した時の施設職員と病棟看護師の情報交換や意識についても明らかにする必要がある。これらの結果から明らかになった問題を共同研究者間で丁寧に検討し、入所者によりよいケアを継続するための施設と医療機関との連携のあり方について、具体的な検討を進めていくことが課題である。

Ⅸ. 共同研究報告と討論の会での討議内容

討議には施設側の看護職と病院の看護職が参加した。討議内容は主に、外来における施設職員の情報提供と外来看護師の情報収集の方法や収集する情報の内容などであった。

まず、外来受診時の問題について、施設看護職から発言があった。受診頻度の少ない病院での情報提供の難しさ、提供した情報が活用されていないこと、障害に対する理解の内容に外来看護師と違いがあり、説明の仕方や提供する情報について悩むことがあること、プライバシーの問題からどこまで情報提供してよいかわからないことなど現状の問題に関する発言が多くあった。また、病院看護師からは、障害について知識はあっても、外来の場面では入所者にあわせた対応ができていないという現状とともに、障害を理解し、入所者にあわせた適切な対応をしたいと思っていること、そのために情報提供用紙など作って、情報提供の仕方に工夫をしてはどうかという提案もあった。また、施設看護職から、外来受診時の同行を職員に任せる際に、看護に関連した情報を適切に交換することの難しさについての発言があった。

これらの討議経過から、施設看護職と医療機関の看護職との間に入所者の外来受診について、これまで十分な話し合いの場がなかったことが窺えた。施設職員と医療機関の看護職は、入所者の外来受診や入院などの具体的な機会を捉えて、入

所者のケアを継続するためにどのように連携を図ったらよいかという話し合いを持つことが急務であると考えられる。また、施設看護職は、外来受診の同行を任せる職員と密な連携を図り、外来受診時に入所者のケアが継続できるような情報交換が適切に行えるよう調整していく必要がある。

表2 外来看護師に配慮してほしいこと

大分類	小分類	要約例
丁寧な情報収集	ゆっくり話を聞いてほしい	ゆっくり話を聞いてほしい
	詳しくきちんと聞いてほしい	もっとしっかり話を聞いてほしい
	きちんと情報収集してほしい	介護を必要とする利用者なので情報をつかんで欲しい
	施設職員からの情報を聞いてほしい	精神状態も含めて入所者の情報を正確に聞いてほしい
受診者に合わせた対応	障害・特性に合わせた対応をしてほしい	利用者のことを理解して対応してほしい 障害があることを意識して対応して頂く態度が欲しい
	緊急時は早急に対応してほしい	特に緊急を要する時、本人の訴えはないが、大変なときは早急に対応してほしい
	障害を理解してほしい	知的障害者への理解・特に意思表示のできない人への配慮 利用者の特性の理解を少しでもしてほしい
言葉使いへの配慮	事務的・命令口調にならないでほしい	一方的な指示にならないようにしてほしい
	言葉使いへの配慮	言葉使いは友達言葉でなくきちんと丁寧語を使ってほしい
親身な対応（その人の身になった対応）	やさしい対応	やさしく接していただければ良い やさしく丁寧に対応して欲しい
	親切・丁寧な対応	丁寧な対応が欲しい もう少し親切に接してあげて欲しい
	事務的に話さないでほしい	外来者にとっては初めてのことで面倒くさそうに話さないでほしい
わかりやすい説明	わかりやすい説明をしてほしい	わかりやすく易しく伝えてほしい 施設入所者に分かりやすい話し方をして欲しい
	詳しく説明してほしい	詳しく言ってほしい
	ゆっくり話してほしい	わかりやすく言葉でゆっくり話してほしい
年齢に応じた対応	年齢に応じた対応をしてほしい	入所の児童であるということを前提に話してほしい
受診環境の調整	待機場所を配慮してほしい	他の患者に迷惑掛けることのないように待機場所や順番に配慮してもらいたい
	他の患者の理解が得られるように働きかけてほしい	他の受診されている方への理解してほしいと言う事を言ってほしい
	プライバシーに配慮してほしい	大きな声で「名前」や「尿を採って下さい」等と言わないでほしい
	不安な行動に配慮してほしい	不安定時の際、周りに迷惑を掛けてしまう事もあるので配慮がほしい
	待つ事ができない受診への配慮	待つ事が難しい方への配慮
	安全に配慮してほしい	事前に利用者の特徴を掴み、危険回避をおこなう
	待ち時間・順番を教えてほしい	いつ頃受診できるかを知らせて欲しい 待ち時間の見通しを教えてほしい
	待ち時間の短縮	待たせないでほしい 早めに診察してほしい
	予約時間を守ってほしい	長時間待つことのできない利用者は落ち着きがなくなるので予約時間に見てもらいたい
	予約ができるとよい	障害者の行動特性から、他の患者さんに迷惑をかけることもあるので時間設定してほしい
施設職員との連携	施設職員との連携	引率職員との連携

表3 外来看護師が入所者と施設職員に働きかけたいこと

大分類	小分類	要約例
適切な対応	特別視をしない	他の人と同じように声かけしていきたい
		他の患者さんと同じように接したい
	理解力に合わせた説明・対応する	障害の程度に合わせて説明し、理解を得たい
		理解度に合わせて対応したい
安心して受診できるように対応したい	診察や処置に対して不安なく、受けられるよう声かけしていきたい	
	家族の状況に応じた協力助言	家族関係が難しい場合もあるので、状態・環境を含めた協力助言等ができていけばいいと思います
情報収集	適切な対応するために情報収集をする	適切な対応ができるように情報収集を行いたい 本人にも話ができるように情報収集したい
	情報収集	受診前に情報収集したい
家族への支援	家族への支援	家族の抱きかかえている問題を聞く姿勢をもって接したい
受診環境	待ち時間の短縮	早めの診察ができるようにしていきたい
		初診でなければ予約をとっていきようにしたい
	待合場所の配慮	ストレッチャーでの来院患者の待合場所の配慮をしていきたい
	安全性	安全性・転倒防止をしていきたい
	プライバシーの配慮	プライバシーを配慮していきたい